第52回

第52回全道医家囲碁大会

名人戦は樋口栄作６段格が優勝！
本因坊戦は山家研司６段格が優勝！

新任挨拶

全道医家囲碁連盟
会長　鈴木（すずき）　英軍（ひでむら）

第47回（2020年）～51回（2024年）まで、コロナ禍により、大会が中止になっていました。また、この間に三宅会長のご逝去もあり、囲碁大会の再開が危ぶまれていたところです。このまま廃止となることも予想され、役員の話し合いでも、賛否両論がありましたが、継続することを決定し、ほっとしました。

予想外だったのは、会長の選出です。私としては、南田副会長が当然会長になるのが妥当の線と考えており、そのように主張しましたが、南田副会長が私を推薦してくださり、なんとなく、引き受けることとなってしまいました。驚きです。

私も好きな囲碁のことですし、微力ながら頑張ろうと考えております。皆様方の応援、特に囲碁大会に参加していただけますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

５年間の休止があり、参加者がどの位集まるかが心配の種でしたが、幸いにも、５年前の大会と同じ20名が参加してくださり、ほっと胸をなでおろしました。

例年プロの囲碁棋士をお呼びしていますが、昨年から現役のプロ棋士の遠藤悦史先生が来てくださることに。

今年も大会日の参加をお願いしております。指導碁も打っていただけますので、ご希望の方はぜひご参加ください。

振り返ると、私の初参加は、第21回（1994年）でした。この当時は前夜祭もありました。医師会員の奥様やそのご友人の女性との対局、ペアを組んでのペア碁などで楽しんでおりました。その夜は、会食もあり、楽しいひと時を送ったことが思い出されます。

今年は11月29日（日）開催の予定です。囲碁に興味のある方は、ぜひ予定を空けておいてください。皆様にお会いできるのを楽しみにしております。

第52回大会成績表

【名人戦】

順　位	氏　名
優　勝	樋　口　栄　作
準優勝	南　田　英　俊
第１位	滝　本　昌　俊
第２位	渡　会　博　志
第３位	岡　村　廉　晴

【本因坊戦】

順　位	氏　名
優　勝	山　家　研　司
準優勝	仲　　俊　之
第１位	鈴　木　英　軍
第２位	有　田　矩　明

（敬称略）

名人戦優勝記

ひぐち耳鼻咽喉科
樋口（ひぐち）　栄作（えいさく）

この度、第52回全道医家囲碁大会名人戦に優勝することができ大変嬉しく思います。世界的なコロナウイルス感染症の流行により、５年間の休会がありましたので６年ぶりの開催になりましたが、令和元年に続いて連覇を達成することができたのはひとえに幸運でした。今年も１回戦がシードとなり、２回戦は佐久本政弘先生、３回戦は渡会博志先生、そして決勝戦は南田英俊先生と、どの局も激しい戦いの碁になりました。以下は決勝戦の解説です。

第１譜　1–50

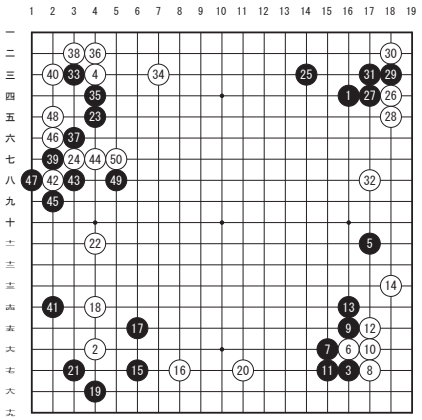
樋口栄作　６段格（黒）対　南田英俊　６段（白）

{白42（２,八)}

私の黒番で、黒５まで中国流に構えました。白は白６のツケから直ちに中国流の構えに手を付けて行き、白14まで黒の厚みと白の実利の別れになりました。厚みを背景に黒15と掛かったのに対し、白16と挟み、白22まで白の狙い通りのゆっくりとした布石になりました。黒23の掛かりに対しての白24の挟み、黒25の小桂馬ジマリに対しての白26の裾掛かりと、白は徹底的に局面を細分化して行きます。

局面が動いたのは、左上隅の折衝で定石の進行を嫌った白が白38と隅に曲がったため、以下黒41のスベリまで白は左上隅に実利を持ち、黒は左辺で白の薄みを伺う進行です。ここで白42と押さえた手が強手で局面が一気に動きました。

＜第１譜（１～50）＞

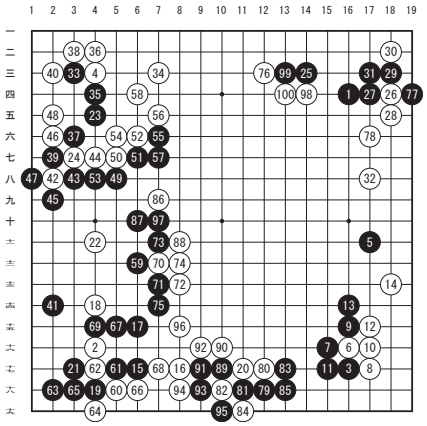


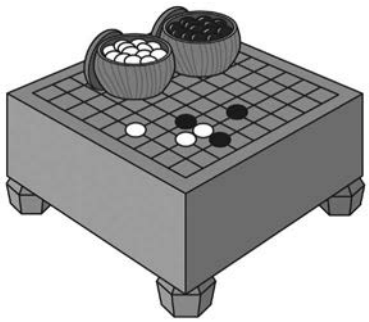
第２譜　51–100

{白82（10, 十八)}

一直線の進行で、黒は左上隅を捨てて厚みを築き、黒59と左辺の白を大きく飲み込む構想です。それに対し白は、白60以下で巧みに左辺の白三子を捨て石にして先手で黒模様を削減し、白76と右上隅の黒に迫る最大の大場に回りました。この時点で、黒は左辺に約50目の確定地と右下辺に不安定な石を抱えています。一方、白は左上隅に30目強の確定地と、根拠のはっきりした陣地が数か所あり追い上げ態勢です。白76に対し、黒は黒77と右上隅の根拠を確保しながら、白の二子取りを狙いました。それに対し、白78と二子を助けながら右辺の白の安定を図りました。ところが結果的には、当然と思えた白78が逸機だったかもしれません。すかさず黒79と下辺に先着し、不安定だった右下辺の黒の一団の根拠を確保したのが機敏でした。先手を取った白は、白86、白88と黒の薄みを衝いて、中央の黒地の削減を図りましたが、下辺の白の薄みを捉えた黒89のキリが強烈でした。白は抵抗することができず、白96まで先手で黒は下辺をえぐることができました。黒97の中央のグズミは要点で逃せません。逆に白に97と当てられると、中央の厚み具合が大きく違ってきます。

＜第２譜（51～100）＞





第３譜　101–150

{黒119（６，五）}

その後、白110とカドに迫られて、右辺に大きな白地を作られましたが、黒も下辺から中央の白に寄り付いて黒135まで、右下辺から中央にそれなりの地を作って収まることができ、この時点でわずかに黒優勢を意識しました。

第４譜　151–209（210以下略）

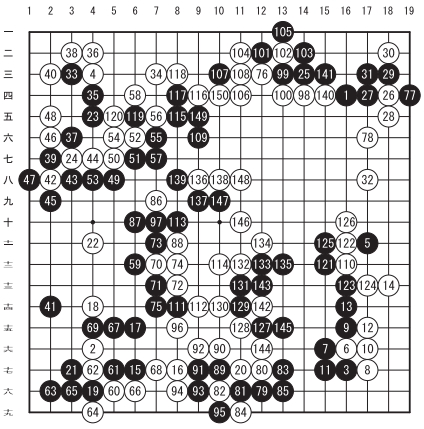
{黒151（11，一）、黒187（12，八）}

一進一退の攻防が続きましたが、終局間際に白に見損じが出て、黒209で左上隅の白地に手が生じ、最終的に白六子が取られてしまい、白は無念の投了となりました。終局後の検討では、そのまま終局した場合でも、黒が10目余り残していたようです。

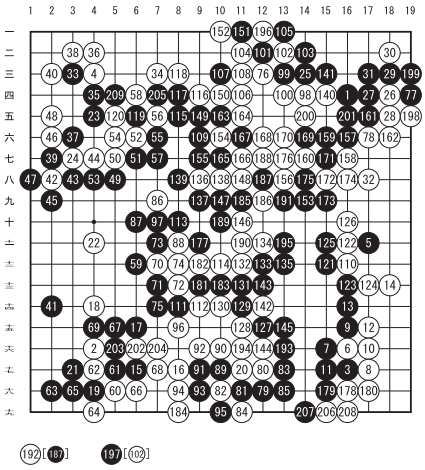
本局は、序盤から南田先生の見事な白番の打ち回しで、黒の難しい碁になりました。白42の気合の押さえから大振り替わりが発生しましたが、結果的には黒の確定地が大きく、やや黒が打ち易くなったかもしれません。その後も難しい局面が続きましたが、何とか勝利することができました。優勝できたのは本当に幸運でした。

今回は北海道医師会の皆様の温かいご協力をいただき、とても充実した楽しいひと時を過ごすことができました。ありがとうございます。来年はもっと勉強してさらに内容の良い碁が打てるよう頑張りたいと思います。鈴木英軍会長を始めとする役員の皆様、遠藤悦史プロ棋士には、大変お世話になり誠にありがとうございました。

＜第３譜（101～150）＞



＜第４譜（151～209）＞



全道医家囲碁大会 本因坊戦優勝記

旭山病院

山家（やんべ）　研司（けんじ）

この大会に最後に参加させていただいてから10年以上のブランクがあり、前回の成績も思い出せないままの参加となりました。日本棋院での免状は懸賞大会で貰った２段でしかないのですが、ハンデ戦には札医囲碁クラブで使わせていただいている６段格での参加でしたので、優勝は思いもよらぬ幸運が重なった結果としか言いようがありませんでした。

父親が囲碁を楽しむ人でしたが教わったのは祖母からで、小学生の頃からルールだけは知ることができましたが、大学入学までは実際の対戦はほとんどなく時々NHK教育テレビの囲碁講座を眺めるだけでした。入学した札幌医大には当時囲碁部はなかったのですが、同好の友人を得て講義中に階段教室の一番上の席で真ん中に碁盤を置き横並びでこっそりと対戦した記憶があります。短期間でしたがいわゆる「はまった」時期があったのですが、医者になった頃からはまたNHK教育テレビの囲碁講座を時々視聴するだけとなっていました。50歳頃に札医囲碁クラブに加入させていただき、亡くなられた皮膚科の高橋先生の指導を受けたりネット碁（パンダネット）も楽しんでおりました。最近10年程また囲碁から遠ざかっていたのですが、衰えてきた頭の体操が必要と意を決して久しぶりの大会参加でした。

大会では第１局目を留萌の髙橋先生、第２局釧路の齋藤先生、第３局北広島の竹内先生、第４局札幌の伊藤先生と打ったのですが、どの碁も勝ち負けがどちらに転んでもおかしくない僅差の勝負でした。齋藤先生との碁は先生の見損じに助けられ、竹内先生との碁は大きなコウ争いに引き込まれ、相手の時間切れで勝ちを貰いましたが碁は負けておりました。

大会を準備していただきました連盟会長の鈴木先生どうもありがとうございました。今年も参加させていただきたく、この１年少し真面目に囲碁に向き合いたく思っております。